

# 人材育成事業

## 村のリーダーを育てる奨学金制度の理念と実態 — ミンダナオ子ども図書館の教育支援の事例を参考に —

「卒業したらコミュニティーのために働きたい」。ハイスクール以上の奨学生採用条件は、将来村の仲間のために働くこととしているため、選考時の面接では全員このように答えます。

さらに、カレッジ及び専門学校を終了した卒業生は、1年間ボランティアとして(米とわずかな手当が支給)村の教会行事や巡回診療の手伝い、教師助手などとして働くことが義務付けられています。しかし、山腹の小さな畑を耕しながらこの約束を履行できる卒業生は少なく、職を求めて村を離れるケースが多いと聞きます。

2004年巡回診療を実施した村で会ったマルチもその一人です。車整備コース終了後有機農法を勉強した彼は、自分の畑をモデル農場にして住民に指導したいという夢を語ってくれました。資金がないというので企画書を出してくれれば検討すると答えたのですが、11月にCMB事務所で聞いた話では、すでに結婚して村を出たそうです。これまで送り出した大学卒業生10名のうち、希望通りコミュニティーのために働いているのは、CMB小学校教師として採用されたドリとメリアンだけです(40号で紹介)。

教育を受けた若者が村に数人いれば、専門を生かして衛生・栄養や農業技術指導ができるだろう。組合育成など住民の組織化にリーダーシップを発揮するだろう。私たちはそう考え、CMBを通じてカレッジや専門学校進学を奨励してきました。まだ成果を云々するには早すぎますが、長期的ビジョンが必要な教育支援の場合、過去10年の人材育成支援を評価して方針の再検討が必要かもしれません。

「私たちは村のリーダーを育てようとは思っていません」。HANDS主催ミンダナオ報告会(2005年10月開催)の講師として招聘した松居友氏は、ミンダナオ子ども図書館(MCL)の教育支援についてこのように話されました。先住民族が主な対象という点で共通するところが多いMCLのことをもっと知りたくて、今回訪問してきました。私たちの支援地城南コタバト州マーベルの北方、車で2時間ぐらいの北コタバト州キダパワンにあります。

MCLでは、貧しい子ども、虐げられている子ども、父母がいない子どもに高等教育の機会を与え、生きる力と自信をつけさせるという方針です。政府軍の爆撃で避難生活を送ったピキットのモロ民族の子どもたちなど、より厳しい境遇の子どもたちへの本の読み聞かせも活動に取り入れていました。

評判を聞いて北コタバト州だけでなくレイクセブあたりからも奨学金への応募があり、その選考に当たっては、スタッフが交通不便な山の村一軒一軒を訪ねて面接をしています。

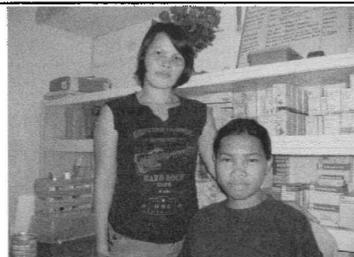
現地法人であるMCLと、現地組織CMBやPFPを通じて支援してきた私たちHANDSとはシステムが異なりますが、教育支援の面でたくさんヒントをいただきました。P1で触れたように、HANDSの現地事務所を開設できれば、皆様のご支援を最大限に生かす奨学金制度に向けて、改善が可能になると思います。今後はMCLからもお申し出いただいたように、ゆるやかなネットワークを築いていければと考えています。(山崎)

## 医療報告

手術は5月に決まりました

前号で心臓弁膜症とお伝えしたハイスクール奨学生ヘルメニアが、マニラの心臓病専門病院の検査を受けて戻ってきました。手術まで定期検査と投薬で体調を維持することになっています。当面必要な経費はHANDSが支援しました。

現地でも教会やメディアに呼びかけて手術に必要な経費100万円の工面に奔走中です。



ヘルメニア(右)とヘルスワーカーのリジャ (2005年11月)

マラリア患者ゼロ更新中  
キアミ地区での蚊帳配布から1年。今もCMBクリニックへの入院支援要請はゼロです。このマラリア撲滅の取り組みを、日本臨床微生物学会ワークショップでポスター発表しました。

(担当九島)